



木はどうして生えてくるの

種が、あちこちにばらまかれている

木の実には、どんなものがあるでしょうか。実を食べるカキ、サクランボ、リスが好きなクルミ、ドングリ、などがありますね。これらは、人間や鳥、サル、クマ、リスなどの動物が実を食べて、その中にある種を、あちこちに運びます。

松ぼっくりは、種が熟すと、かさが開き、風に乗って飛ぶ種が、とび出してきます。カエデなどの木の実は、プロペラのような形で、風に飛ばされて、遠くまで運ばれます。

ネムノキやサイカチなどは、エンドウ豆のような実をつけ、種が熟すと、さやが割れて、種があちこちに飛び散ります。ほかに、さやが割れて、種がとび出す木は、たくさんあります。こんなふうに、木の種は、いろいろな形で、思わぬ所まで、運ばれているのです。

よい場所に落ちた種だけが、芽を出せる

運ばれた種は、ほんのわずかでも土があり、水があたえられ、日光があたれば、やがて芽を出します。運よく、芽が出せる所に運ばれた種は、その地面の近くに生えているほかの植物と競争しながら、成長していきます。大きな木の下などで芽を出すと、日光がなかなかあたりません。根を張るのが速い植物や、成長の速い植物の近くなら、おそい植物は、根を張れなくなったり、ひかげになったりして、かれてしまいます。

たくさん作られ、たくさんばらまかれた木の種のうち、たまたま運のよかったわずかな数の種だけが、芽を出し、大きくなり、また、次の子孫をふやす、種を作ることができるのです。（監修・矢野 亮）

